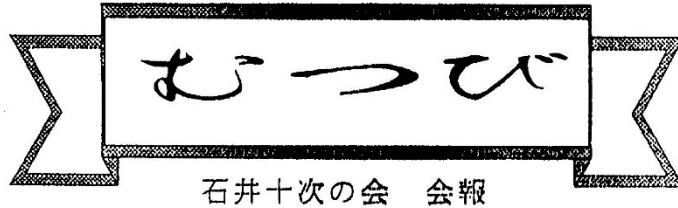


2021年
(令和3年)
4月13日



283号

地域のかこそが生きる宝

西都市 田爪 淑子

心の中で一方的に思いを寄せているだけで、詳しい事はほとんど知らない私が、寄稿をしていいのだろうかと思いながら書いております。「友愛社」は距離的に自宅から近く在りながら「石井十次の会」とのご縁に恵まれませんでした。

しかし思いがけない出会いからこの原稿を書いております。

そのご縁に感謝して徒然なるままに書く事をお許し願いたいと思います。

私は戦後生まれ（昭和24年生）なので、小学生時代はまだまだ物が無い時代でした。日本全国が貧しく、衣類や食料品も少ない時代でした。私の家庭は祖母、両親、姉妹弟5人の8人家族で、祖母は5人いる孫に優しく厳しく接してくれました。祖母のお陰で掃除や身の始末を学んだと思っています。

47年前に嫁いだ夫の家には重度の身障者（夫の弟※以下「弟」と称す）がおりました。弟は両親と兄姉から余るほどの愛情を受けて自宅での生活をしていました。

夫との結婚を決めようとしていた時、私の両親は「その事はよく分かっているのだろうね」と嫁ぐ決心を確かめました。私は愛情に包まれた夫の家庭を見ていて不安は覚えなかったと記憶しています。

同居生活が始まり、私達は次々と子宝に恵まれ9人という大家族での生活でした。

同居の上に大家族の生活では大変な事もありましたが、後々考えると子育て環境としては良かったなと思える事が多々ありました。3人の息子は叔父に当たる弟、祖父母、叔母と同居していたことに由来するのでしょうか、周りの人に大変優しい大人に成長してくれたと思います。当時、弟の事で専門家の方が我が家を訪問される事がよくありました。子どもと同居している環境は弟にとっても刺激を与えるので、良い事でもあると言われました。

夫の家庭は農業を営んでおり、私は農業に不慣れながら労働者としては立派な一員でした。早期水稲を中心として裏作に千切大根やきゅうり、大豆に路地物野菜と120aを耕作しておりました。義父と私が主に従事者でしたが、夕刻になると後の仕事を私に任せて剣道の指導へ行くことが義父の日課でした。子ども達は大勢の道場生と大きな家族のように育ちました。この事は何よりも大きな宝になったと思っています。

「子どもは親を選べない」「五体満足な体を持っている」とはよく言われる言葉です。

命は母体の中で淘汰され生き残った者が生れ落ちると聞いた事があります。

生れ出た命は使命を持って生れる、選ばれて生まれた命を大切に生き抜いてほしいと私は思います。人は一度しか生まれる事は出来ません。一度しかない人生をどう生きるかはその人の考え方で決まると思います。生きる為の生きて行く時代や環境はとても重要です。人間は一人で生まれて一人で死んでいきますが、人は人間社会の中で生活しなくてはならず、人の間で成長していくものだと思っています。そして、その関りが大変大事だと思っています。

私たち大人は子ども達を心豊かに育てる義務があると思っています。我が子であろうとなかろうと子ども達は未来の社会の宝です。

さて、石井十次先生の偉大な功績はその時代背景と共によく耳に致しました。

石井十次先生は生涯を福祉の仕事に捧げられました。当時のご苦労は筆舌に表し難い事の連続であったと推測いたします。

その石井先生の偉業と精神は、今も脈々と引き継がれ社会の中で生き続けております。

自然の恵みに感謝し日々を過ごし、自然と共に生きる事が心の安らぎをもたらすと思っております。

過去に友愛社で行われた「^{こうぞ}楮」から紙を作るワークショップ」に参加したことがあります。紙を作ることは出来ませんでしたが、^{こうぞ}楮を紐状にしてそれを編んでタペストリーを作りました。

自然界の草から取り出して染める布や毛糸、その布や毛糸で衣類を作る…自然界の物で生活の必需品を手作りする素晴らしさ…。

豊かな自然と共に生活する事こそが大事であり、学ぶべきことがあると思います。

まだまだ「友愛社」の活動の全てを知ることは出来ませんが、私にとってはすばらしい宝庫の様です。

去年は人類史上例を見ない新型コロナウイルス感染症の蔓延で日常生活が大きく変わりました。今までのような生活スタイルに戻る事は出来ないでしょう。今までも日本人は勤勉な国民性と地域の力・助け合いの精神で災害を乗り越えて来ました。

コロナ禍の今、心通う温かい隣人たちがいるこの土地で生活出来る有難さに心から感謝している今日この頃です。

彫刻家 田中等氏との不思議なご縁

宮崎県総合文化公園の北側に、郷土先覚者6偉人の1人として石井十次の銅像が建立されている。この銅像は左右に孤児を連れ、右手を高く指さしている。石井十次資料館には、この銅像の原型が展示されており、大変興味深い。

この銅像の制作者が彫刻家田中等氏である。田中等氏は、児嶋草次郎理事長と高鍋高校の同級生であり共に美術部員でもあった長年の友人である。

田中等氏のそれまでの工房は、高鍋町の町の中心部にあり、大量の騒音と石粉を出す作業には不適切な環境だった。作品も大型



教会前に建つ作品

化し、工房が手狭となり移動先を思案中のところへ、児嶋理事長から、友愛社敷地内に仕事場を構えるようにと誘いを受けられた。それは二人の友情と児嶋理事長の福祉と芸術の融合という理念からくるものだった。

そんな訳で田中等氏の石彫工房は、友愛社のアンジェラスの森にある。かつては地域の独立した門下生達に朝夕、時を知らせたアンジェラスの鐘が鳴り響いた、アンジェラスの森。森の教会の前にも田中等氏の作品が設置してあり、趣のある空間となっている。

田中等氏は、今や国内だけでなく、彫刻制作のため年の半分ほどを海外で過ごす現代彫刻家になられたが、昨年はコロナ禍で渡航できなくなった。そこで木版画に取り組み、中学校美術教師の妻との初の二人展を開催。先日、私はその会場で奥様の田中「^{せつ}攝」という名前の響きに懐かしさを感じた。田中等氏曰く「画家であった義父が『朝倉^{あさくら}攝』から取った名前です。結果的に彫刻家の妻になったのですから、不思議な縁ですね。」

この言葉を聞いて私は大変驚いた。私は今から半世紀程昔、緑ヶ丘学園延岡短期大学で「東洋のロダン」、「日本の彫刻界の巨匠」と呼ばれた「朝倉^{あさくら}文夫」の同郷の後輩だった三浦直政先生（大分県出身、東京美術学校卒）から、幼児教育の造形表現を学んだ。当時すでにご高齢だった三浦直政先生は、私達学生に優しいまなざしで「私は若い頃、朝倉文夫先生の2人の娘さんの家庭教師をしていた。」長女は「朝倉^{あさくら}攝」（著名な舞台美術家・画家）、次女は「朝倉^{あさくら}響子」（彫刻家）になったことなど貴重な講義を受けた。あれから随分時が過ぎたが、「朝倉^{あさくら}攝」の名前にあの頃を思い出し感動が蘇った。

☆作品集出版のご案内・・・「MOON DROPS 一月の雫」

田中等氏の彫刻49写真（オールカラー）に、恩師で日本を代表する現代歌人の伊藤一彦先生が新作の短歌を添えた共同出版。短歌の英訳をクーパー・マイケル氏が担当し、この共著を国際的な作品集にしている。県内書店で絶賛販売中。鉦脈社。2,200円（税込）16ヶ国に設置した現代彫刻と現代短歌の対話が素晴らしい。

私の母は晩年、伊藤一彦先生による批評を楽しみに新聞短歌投稿を続けていた。

—— 人生は、不思議なご縁を紡ぎ繋がっている様に思える。 ——

参考資料 MOON DROPS 一月の雫、開拓（第五号）、鳴海ヶ丘幾星霜

編集委員 徳地順子（高鍋高校美術部 OB）



石井十次像

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【都城市】 鶴田 美代 柳田 勉
【伊勢崎市】 神倉 雅代
【横浜市】 富山 伸子
【熊本市】 下園 梓

★ご寄付をいただきました（敬称略） （一般）

【西都市】 長野 孝吉
【高鍋町】 友草 孝一
【木城町】 森 さち子

★2/21～3/20 の資料館来館者 団体・グループ 7人 個人 12人 合計19人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により3月20日までのものとしています。

★当面の行事

鯉のぼり掲揚

4月17日（土）

～5月15日（土）

★5月号の通信発送作業

5月11日（火）9時から印刷・製本
12日（水）9時から製本・発送

通信の発送作業のお手伝いをしていた
だけのボランティアの方を募集しており
ます。簡単な作業です。興味のある方は
下記までお問い合わせください。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の
個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社
後援会「石井十次の会」

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

yuuaisya-juujinokai@ki.jo.jp

石井十次生家を訪ねる



生家を正面から見る

今回は、十次生誕の家を訪ねました。
宮崎県指定文化財でもある。

生家の裏に居住され、守っておられる十次
の曾孫娘恵・強氏のご夫妻と面談。

明治10年（1877年）西郷隆盛の「征
韓論」がやぶれ「西南戦争」勃発。生家はそ
の騒動に巻き込まれて消失した。十次12歳
の時だ。

その後、復元され、空き家になっているが、
古いけど、現存しているし、遡ると140年
ぐらいは経っていると思われます。

恵氏は「管理するのも大変です」と語って
おられました。

前庭には、剪定された木々も美景を呈して
います。

※ 編集後記

「むつび」巻頭の1～2頁は西都市議会議員の
田爪淑子氏からの玉稿をいただきありが
とうございました。

静養館前の十次お手植えの老梅はびっし
りと実をつけています。

・・・ 文責 生駒